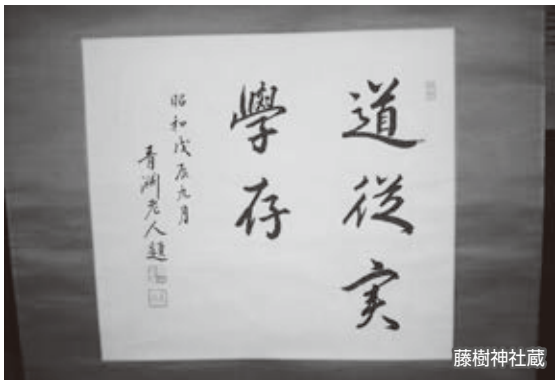
広報たかしま
令和2年 9月号 No.248

渋沢栄一と藤樹神社

2024年に刷新される紙幣のデザインに指定され、令和3年の大河ドラマの主人公としても注目されている渋沢栄一。「日本近代資本主義の父」と呼ばれた実業家と高島市の関係についてご紹介します。

渋沢栄一の生涯

天保11年（1840）、武蔵国血洗島村（現在の埼玉県深谷市）の豪農の長男として生まれ、幼い頃から『孝経』や『大学』、『中庸』、『論語』などを読んで学問に励みました。そうして培った教養を生かし、14歳の頃には難しい藍の買いつけを成功させるなど、農家としての経験を積んでいきました。のちに、京都御所の警護をしていた一橋慶喜（のちの15代将軍）に仕える武士となり、江戸幕府終焉後には明治政府の大蔵省で日本の財政の一端を担いました。明治6年（1873）に大蔵省を退所すると、日本初の銀行である第一国立銀行（現在のみずほ銀行）を創立し、他にも300社以上の企業設立に関与する実業家へと転身しました。



藤樹神社蔵

道従実学存（道は実学によって存す）

藤樹神社蔵

聖凡一性（聖人も凡夫も同一平等である）

論語と算盤の一致

渋沢栄一が一貫して主張した理念が「論語と算盤の一致」でした。これは、明治維新以降も世間に色濃く残っていた「士農工商」のような階級差別思想に対して、中国の思想家孔子の教えをまとめた『論語』のなかの「道徳心」と「経済活動（金儲け）」を一体化させ、蔑視されていた商業者の社会的地位の向上を目指すという考えです。そのためには、私利私欲のために働くのではなく、「公益」のために「実践」することを重要視しました。実際に、彼は本来利益を第一とする実業家でありながら、民間企業の創立・育成に加えて教育や社会福祉、民間外交の推進などの公益事業にも尽力しました。

藤樹神社の創立

実践を重んじる陽明学に共感していた渋沢栄一は大正10年（1921）に、現在の安曇川町上小川の藤樹神社創立に伴う「藤樹神社創立協賛会」の顧問に就任しました。その創立資金を募った際、自身は当時の総理大臣の月給に相当する1千円もの寄付を行い、さらに三井・岩崎・古河・住友・大倉・森村などの大手財閥にも寄付を呼びかけるなど、資金調達に大きく貢献しました。

藤樹神社鎮座祭

創立後、藤樹神社へ渋沢栄一直筆の墨書（写真左上）が奉納され、その言葉からは「実践」と「公益」を重んじた彼の生きざまが感じられます。

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

空を見上げると、真っ青な空にもくもくとした白い雲、それだけでも「夏」を感じることができますね。

しかし、今年は梅雨明けが例年より遅かったせいか、「夏」が短かった気がします。それでも季節は巡り、これから暑さもおさまり、過ごしやすい「秋」がやってきます。

こんな時だからこそ、遠くの観光地へ行くのではなく、一番身近な地域の魅力を再発見する「ローカルツーリズム」を楽しんでみませんか？（Y.O）

発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。